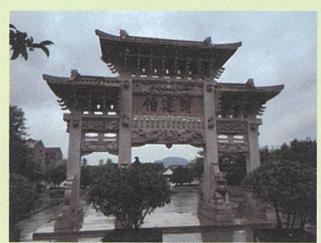


「異国にふれた半世紀」

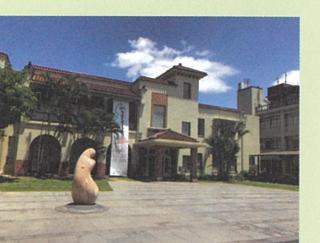
越劇同好会 田口 純

「台湾から荷物が届いたよ！」台湾ってどこだろう？と思いながら興味津々の私。開けると中から異国の香り。入っているものは、大きなお饅頭、お茶の葉、小さな提灯、漢字だらけの手紙、虎マークのもの！？などなど。どれも見たことがない、珍しいものばかり。今から半世紀前に私が初めてふれた異国の香りと文物です。1970年前後、私は小学校3、4年生で、父が仕事で台湾に行っていた時にお世話になった方からの春節時の贈り物でした。お分かりの通り、贈り物は月餅、ジャスミン茶、中華風のミニミニランタン、「タイガーバーム」です。家族3人で「珍しいねえ、いい香りがするねえ。これ（タイガーバーム）何するものなんだろ？」などとおしゃべりしながら、異国の贈り物で楽しいひと時を過ごしました。しかしその後、台湾との国交が断絶し、残念ながら先方との往来も絶えてしまいました。

それから30年ほど経ち、大いに迷っていた不惑のころ、王陽明に出会いました。陽明学の書物を読み始め、それまでの自分を反省、三省しつつ、それからの自分の人生について思うようになり、いつかは中国に行ってみたいと願うようになりました。望めば叶うものなのか、天命を過ぎた50代半ばに、友人から一緒に王陽明に会いに行こうと誘われました。初めて行く中国、福岡から上海まで飛行機で1時間半、近くなったものです。上海から杭州、紹興、余姚、さらには寧波まで一週間の旅。



王陽明記念館の前



台北二二八紀念館

「グローバル理解と教育」

岩橋 嘉大

私は教員として歴史や公民科の教育に10年以上携わってきた。後藤みなみ委員長との関係もあり、いつしか中国という国に関心を持ち、その歴史や文化に魅了されるようになった。そして、今では日々中国語を学ぶほどになっている。

私が最初に赴任した高校では修学旅行先が台湾ということで、生徒とともに台湾の歴史を学習することになった。文化祭では近松門左衛門の『国姓爺合戦』をテーマに演劇を行った。主人公の鄭成功は、台湾で明の復興運動に活躍し、長崎生まれの日本人を母親に持つ人物である。本や映画を参考にして脚本づくりに取り組み、苦労しながらも生徒たちとともに劇を上演できたことは大きな喜びであった。また、異文化理解教育の一環として、後藤委員長を講師にお招きしてご講演をいただいた。後藤委員長との出会いは、その後の私の中国文化への理解に大きく貢献する良縁となった。修学旅行では、九份、国立故宮博物館、台北101を訪れ、台湾現地の高校と学校交流を行った。普段は引っ込み思案な生徒たちが、一生懸命コミュニケーションを図り、次第に笑顔で打ち解けていく様子は今でも鮮明に思い出すことができる。そして、中正紀念堂や中華民国総統府をまわった際、歴史的の理解の重要性を肌身で感じることができた。また、引率途中に台北市にある龍山寺に立ち寄った。美しく装飾された境内の建物やお経の大合唱は、感動的な光景であった。

その後、高校の歴史教育に大きな転換点が訪れ、2022年度

から『歴史総合』という新科目がスタートすることになる。折しも兵庫教育大学院で長期研修の機会を得た私は、「アジア経済の発展」を主題として授業開発をするべく、研究活動に取り組むこととなった。『歴史総合』は世界と日本の近代史を相互に関連させながら学び、現代社会の課題の形成要因を探求するという特徴を持っている。私は南京町と華僑の人々との関係に着目することで、生徒たちが身近な生活から歴史に入っていくことができると考えた。そんな時、後藤先生が林 同福会長や神戸華僑歴史博物館の安井三吉先生から華僑に関するお話を伺う機会を用意してくださった。移住当初の華僑の人々の大変な努力や減少傾向にある現在の動向など、貴重なお話を聞くことができた。世界をグローバルに移動する華僑と神戸をつなぐ教材を作成できる確信を持つことができた。

近代において幾多の試練を経て、戦後の日本と中国は飛躍的な経済成長を果たした。これから生徒には身近な地域と諸外国との歴史的なつながりに気付き、グローバルな理解を基盤に望ましい未来社会を創造していくほしいと考える。私自身も、今後ともますます中国や台湾について学び、親交を深めていきたい。



台南鄭成功廟



台湾故宮博物院

「孫文 2021」辛亥革命110周年記念事業「孫文ゆかりの地フィールドワーク」11月14日

後藤 みなみ

神戸日華実業協会13名、神戸市シルバーカレッジ中国文化同好会15名を含む50名が参加。オープニングに日中友好演奏、濱崎 繁一さんによる中国民族楽器フルス・日本のよし笛演奏「大海阿故郷」「ふるさと」のあと、林 同福会長がはじめのことばを述べました。来賓に孫文記念館魚住 和晃館長、神戸日華実業協会植村武雄会長、中華総商会鮑 悅初会長、中華民国留日神戸華僑総会陸 超会長にご臨席賜わり、来賓を代表して魚住館長から挨拶を賜りました。

孫文ゆかりの地フィールドワークに参加して

神戸市シルバーカレッジ中国文化同好会 参加者共同寄稿

我々は神戸市シルバーカレッジ中国文化同好会の校外研修として参加しました。メンバーの多くは、孫文については、学生時代に歴史の授業で、辛亥革命を起こして清王朝を滅ぼし中華民国を成立させた革命家であることを学んだ程度の知識しかありませんでしたが、今回のフィールドワークに参加して、神戸とも非常に深い繋がりがあることを改めて学習しました。

陳來幸先生の講演では孫文のことや、神戸で孫文を支えた人たちの活躍を分かりやすく丁寧にお話くださいり、理解を深めたところで、各班15名前後の3班に分かれてフィールドワークへ。

最初は諫訪山公園へ。のじぎく会館からは急な上り坂でしたが、眼下の景色を楽しみながら高台の金星台に到着。金星台が金星観測に由来することは知っていましたが、ここが孫文ゆかりの地であることは思いもよりませんでした。そこには「孫文先生諫訪山潜居の地」の石碑があります。1913年、孫文は袁世凱の專制政治に対して革命を起こすも、その軍事力に敗れて日本への亡命をはかります。川崎造船の松方幸次郎の援助により、孫文は神戸港より上陸、旧諫訪山温泉の常盤花壇別荘に一時身を潜めました。講師の蔣海波さんからは孫文が周りに怪しまれることなく入国出来た興味深いお話を聞きました。孫文と神戸の関わりをひとつ学びました。

続いて金星台より兵庫県庁まで坂を下ると、1号館の外壁には、「兵庫県立第一神戸高等女学校跡」と「孫中山先生大アジア主義講演会の地」と書かれた2つの石碑プレートがあります。孫文は1924年11月28日に、現兵庫県庁の場所にあった旧制第一神戸高等女学校講堂において講演を行い、東洋は仁愛によって統治される意の王道であり、西洋は覇者が力によって統治される意の霸道であると「大アジア主義」を唱え、3000人もの聴衆を



孫文フィールドワーク講演



県庁前 3班



1・3班集合写真



2班集合写真

集めましたとお聞きました。この石碑プレートは、あまり目立たずひっそりと存在していますが、2025年には新庁舎が完成する予定と聞き、この機にもっと立派なものにしてほしいと、孫文ファンとして願っています。

次の訪問地は神戸中華同文学校です。1899年に梁啓超が華僑子弟教育のための学校設立を提起し、それに在神華僑が応えたことが創立の起源とお聞きしました。1959年に建設された校舎は、中国伝説の靈獸である龍をデザインしています。日本人や欧米人の入学も多いとお聞きして驚きました。学校の外壁には、孫文来訪の記念プレートが掲げてあり、1913年3月13日に、孫文が当時この地にあった神阪中華会館を訪れて大歓迎を受けたとの説明を伺いました。このプレートや龍のデザインの校舎は、初めて観たり聞いたことで、孫文についての学習を深めるとともに、現地現場を訪問するフィールドワークの楽しさを感じました。途中、関帝廟にも寄って、最後は大倉山公園内、神戸文化ホール東側の孫文胸像です。1965年に孫文生誕100年記念として建立されたそうで、胸像前には、第10代神戸市長の中井一夫さんの書を記した碑文もあり、孫文の「大アジア主義」が大きな感銘を与えたことが記されています。その隣には、孫文の言葉「博愛」が刻まれた神戸日華実業協会創立100周年の石碑があります。また、神戸で生まれ、中国古典に精通した日本画家の橋本関雪の顕彰碑も近くにあり、身近な所での中国に関する新たな発見でした。

今回、「孫文ゆかりの地フィールドワーク」に参加させていただき、孫文と神戸の関わりについて学び、現場現物を見て大変有意義な1日でした。陳來幸先生をはじめ、フィールドワークで丁寧に解説してくださいました講師の方々、運営スタッフの皆様、お世話になり、ありがとうございました。